

桜の花が散り始めるころ、「この夏はどこに行こうか」とぼんやり考え始めた。北のフィールドは夏だけであり、夏を逃したら来年までお預けである。

(カムチャツカに行きたいなあ)。

昨年、植生調査で一緒だった山岸さんを思い出した。調査が終わって皆が帰り支度をしているのに、最後まで草原に寝そべて、植物の名前を調べていた人だ。

(山岸さんで行ったら楽しいだろうなあ)。

山岸さんの研究対象のエゾエンゴサクについてウラジオストクのヤクーボフさんに訊くと、写真付で生えている場所を教えてくれた。それを山岸さんに転送すると、忙しい中、行ってくれる、という。お友達の藤原さんも同行、と。これでカムチャツカに行ける！

エゾエンゴサクは日本では早春の花だけれど、カムチャツカでは5月-6月初めに咲くらしい。今回の行程の6月中旬は開花期よりやや遅いと思われた。が、雪解けの遅いところで探そう、ということになる。

7, 8月だとカムチャツカへは成田から直行便が出るが、6月だとウラジオストク経由で行くことになる。6月14日朝10:30、成田空港に集合。顔合わせした途端、トランクの鍵を忘れてきたことに気づく。真っ青になって案内所に訊いて鍵屋さんに鍵を開けてもらうと、3100円、と。開いてよかったというもの、出足から痛い出費である。

ウラジオストクで最初の心配はホテルだった。ウラジオストクは一昨年のAPEC会議を機にずいぶんインフラ整備が進み、空港も新しくなった。ホテルは旧空港の近くだったが、新空港はそこから数km離れているらしい。つまり、新空港から旧空港まで行かなければいけない。ウラジオに着いて案内嬢に訊くと、7番バスに乗れ、という。バス停を訊くと、「この前の道」、という。が、バス停らしいものはみつからない。どこで待てばいいのだ？こちらの様子を察してタクシーの運転手が「旧空港までなら300ルーブリで行ってやる」という。

「そうじゃない、7番バスを探しているんだ」と突っぱねていると、運転手が突然、指をさした。

「あれだ！」

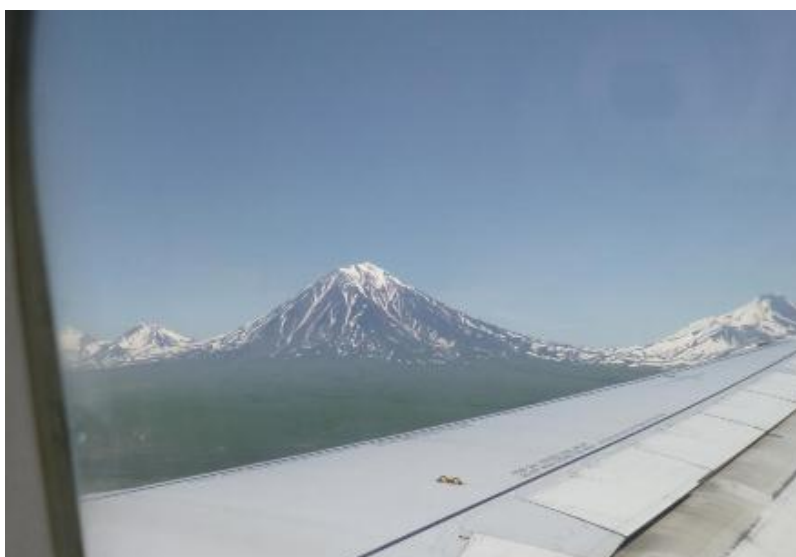
見ると、道路の果てから7番バスがやってきて、今にも向こうの方で停まろうとしている。運転手さんにThank you というと、皆で重い荷物を持って走り出した。料金は3人で108ルーブリという。どういう計算かと思ったら、人も荷物も18ルーブリ、つまり、3人+3個で108ルーブリということだった。旧空港のバス停を教えてもらって下車、無事ホテルにたどり着いた。

ホテルの近くにはライラックらしい花が満開であった。が、近づくと葉の形が違う。そ

の辺りの道端の雑草を見て楽しむ。ツバメが数羽、飛んだり降りたりしているのを、藤原さん、山岸さんが撮影。藤原さんの特大望遠レンズだと、鳥が手に取るように写っている。その後、林を歩いたが、大した林でもないのに、出てきたら全員に1匹ずつダニがついていた。

翌朝、ホテルの送迎バスで新空港へ。荷物を2つ預けようとしたら「1個は有料」と、2300ルーブリ（約7000円）取られる。今回はどうも予想外の出費が多い。チケットは、「3人一緒で」と頼んだのに、座席は縦一列で、機内で話もできず。

いよいよ着陸の機内放送。これが入ると、飛行機はほぼカムチャツカ半島西海岸上である。まずオパーラ山、しばらくしてヴィリューチンスキー山、遠くにゴレーリー山、ムトノフスキー山。真ん中の席で一部しか見えないが、さすが6月、まだ山にかなり雪が残って美しい。そしてついにペトロパヴロフスク市の背後にあるコリヤーク山。曇天時には雲の上に山頂しか見えないこともあるが、今日は稜線が長く尾をひいて見える。良い天気だ。



空港にはガイドのアンドレイさんが迎えに来てくれる。1年振りで、話が弾む。

ホテルで休息もそこそこに火山研究所へ。去年日本で博士号を取ったレーナが待っている。今回の植物手続きはレーナが頼りだ。彼女のリクエストに目いっぱい応えて持ってきた生やしそば、生うどん、みりん、ソースなどを一気にはき出す。これでトランクがほぼ空になった。

レーナは相変わらずひっきりなしに良くしゃべる。ただ、以前の思いつきのおしゃべりと違い、今回は、研究所の契約の責任を負っているためだろう、「計画書の通りに行動すること」「ヒグマに気を付けて安全を確保すること」、と詰問調でたて続けに指令を出し、ガイドのアンドレイを辟易とさせていた。

打ち合わせ後、市内観光と称して3人で町の中心部へ。以前からあった州政府の建物は、

地方政府に格上げされたためだろうか、入口の上には金文字が入り、建物も塗り替えられて立派になっている。レーニン像 —倒すか倒さないかで大激論の末、歴史の1ページの意味で残された— や、ペトロパヴロフスク市の象徴である聖ペテロ・パウロの像などを見る。思ったより風が冷たく、さすがの帯広在住の藤原さんも「どこかで温まりましょう」と。



海岸沿いのカフェに恐る恐る入ると数人がシャシリク（串焼き肉）を食べている。肉の塊、というと贅沢に思うが、ここでは鶏肉、豚肉、羊肉が選べて、200ルーブリぐらい（600～700円）で、お肉にしては比較的気軽に食べられる。藤原さんは羊肉に感激、「ロシアの人はお肉の食べ方を知っている」といいながらかぶりついている。

カフェを出て海岸を散歩する。海からすぐ「愛の丘」という急峻な崖が切り立っている。愛の丘にまつわる話を昔きいたことがある。自分が海に行っている間、恋人が他の人と結婚してしまったことを知った男が、怒りのあまりこの崖から恋人を突き落した、という伝説である。漁業の町ペトロパヴロフスクでいかにもありそうな話ではないか。海岸は内湾で波も割合穏やかであり、遠くに対岸のヴィリューチンスキー山が雲の切れ目に見え隠れしている。



歩くうち、ふと崖の麓の植物に目が留まる。マルバトウキ？にしては、葉がずいぶん緑で葉脈が多い感じがする。花が無いのでよくわからない。そのうちにその上の植物が気になり、足はさらに崖の上へ。この辺が、我々が品行方正な旅行者になりきれない所以であ

る。崖にはタネツケバナ、アライトヨモギ、シコタンソウなどが貼りついている。さらに上を見ると、緑が茂る中、薄紫色のエゾミヤマハンショウヅルがあちこちにふわふわと咲いている。他にも、面白そうなスゲ、シダなど。こうして初日というのに思いがけず、押すべき標本がたくさんできてしまった。



今回目指すアパチャ村は、ペトロバヴロフスクから西に車で約 4 時間走ったところにある。北海道にアイヌ語の地名があるように、カムチャツカにはいかにも原住民のものらしい地名がある。アヴァチャ、アサチャ、ソコチ、エツソ、など。アイヌ語のように何等かの意味があるのだろうか。アンドレイによると、アヴァチャ山のアヴァチャは女の子の名前、ということ。アパチャ、アサチャもそうかもしれない。

アパチャでの宿泊は、テント泊にしようか、でも 6 月だと急に寒くなるかもしれない、などと考えていたところ、レーナは「テント泊なんてとんでもない」という。アパチャは熊が多い所らしく、去年行った人の話ではテントの周りを熊が一晩中歩き回っていて、寝られなかったそうである。そこでホテルの敷地内にあるという小屋を予約してもらった。着いてみると、ガス台、電子レンジ、シャワーなど完備の、快適すぎる小屋であった。小屋のまわりにはキバナノコマノツメ、オオバナノエンレイソウなどが咲き、面白そうな場所である。アンドレイのつくってくれたゆでマカロニをいただいた後、早速出発。目指すはヤクーボフ氏の教えてくれたグラッドキー山の山麓のエゾエンゴサクである。

グラッドキー山はアパチャの小屋から東に戻る方向にある。途中、道にロープを張ってある所があり、通行させてもらうように頼む。相手は、「熊が 3 匹この辺をうろついているから気をつけろ」、と。レーナの話といい、いつ熊が出てきてもおかしくない。

車から景色を見ると、思ったより季節が進んでしまっているようである。グラッドキー



山麓もヤクーボフ氏の写真の時期はとっくに過ぎて、道端の草もすでに丈が高い。運転手のセムヨンさんに、「とにかく、雪のあるところへ」と頼む。かなり長い時間走った後、道の先が雪の残る峠に続いているのを見て、希望をつなぐ。

峠の周辺はなだらかな丘に雪が斑状に残り、春まだ浅い様相であった。峠からの眺めは後回しにして、取りあえずエゾエンゴサクを探す。最初に踏み込んだミヤマハンノキ低木林で発見！しかし花は枯れかけで、やっと間に合った感じである。ちょうどスマレの季節であり、スマレにも詳しい山岸さんがエゾエンゴサクを計測しながらスマレを解説してくれる。スマレの同定はスゲより難しいと思う。特徴が曖昧に思えることもあるが、枝分かれ、葉形、花の特徴などが、セットとして頭に入ってこないのだ。1つ1つ観察しながら覚えるしかないのであろう。

ここではいろいろな植物を見た。ミヤマスマレ、タニマスマレ、キバナノコマノツメ、ヒメイチゲ、ミツバオウレン等。チシマキンバイソウの黄色い蕾がたくさんあった。あと1週間もすればいつか写真で見たような黄色いお花畑になるのだろう。



帰りは川を渡る所で山岸さんがストップをかける。季節は過ぎてしまっているが、エゾエンゴサクのありそうな場所、という。探してみると川の土手の斜面に咲き残っているのが見付き、さすが、と感心する。斜面の下のオニシモツケの河原にも生えている。ヤクーボフ氏が、「エゾエンゴサクはオニシモツケの茂みに生える」と書いていたのを思い出す。

ここではもう1つうれしいことがあった。橋の上から川岸を見ているうちにシベリアイワブキらしい葉を見つけたのである。北の方では珍しくない植物だし、よく川や沼等の水際に生える。花はまだのようだったが、デルタ状の鋸歯を持つ円形の葉が何とも愛らしい。

エゾエンゴサクは、一応採集はできたというものの、思いがけず季節が進んでいることがわかった。そこで、翌日はペトロパヴロフスクへの帰途、積雪が多いことで知られるヴィリューチンスキー峠に行くことにする。エゾエンゴサクはペトロパヴロフスク近郊でも見られるということなので、時期さえ合わせれば見つかるのではないかと期待を込めてのことである。

ヴィリューチンスキー山 (2,173m) というのは、ペトロパヴロフスクの湾の対岸に見えたあの山である。ヴィリューチンスキー峠はその南西にある。アパチャ村から東に戻り、アヴァチャ湾の手前で右に折れ、あとはひたすら南下して峠を目指す。1本道をヴィリューチンスキー山を左に見ながら走り、突き当りの標高差400m近い急斜面をつづら折の道で一気に切り切ったところが峠であり、ここからはヴィリューチンスキー山が下からというより“横から”眺められる。

急斜面までの道はゆるやかな登り坂になっていて、季節が巻き戻っていく感じである。しばらく行くうち、早春の林になる。山岸さんが、北海道とは、木々の芽吹きと下草の成長のタイミングが違う気がする、と。そういう見方で林を見たことはなかった。実際に現象として捉えられたら面白い、と思う。取りあえず峠まで行くことにしていたが、山岸さんはこの辺でストップしてエゾエンゴサクを探したいのだろうな、と思う。でもここまで来たらどうしても、峠からの景色を一目見たいのである。

「もうすぐ」と言われたわりにはずいぶん時間がかかる、と思った頃、車は急斜面の下にきて、つづら折の道を登り始めた。道の両側の雪壁が高くなったり低くなったりして、坂全体が雪に覆われている印象である。道を曲がる度、高度が上がり、景色が開ける。

「・・・すげえ・・・」

と藤原さんがつぶやく。

「・・・すごいね」、と山岸さん。

「アンドレイさん、すごい、ってロシア語で何ていうの？」

アンドレイはちょっと考えて答える。

「クルータ。」

クルータ、というのはもともと崖などが急峻だ、ということである。転じて、マフィアなどの醸し出すこわもて的な雰囲気を目指す。それがさらに転じて「すごい」なのだろう。2

人はこれにオーチェン(=very)を加えて叫びだす。

「オーチェン・クルータ！」

「オーチェン・クルータ！」

峠はほぼ雪に覆われ、一部雪が解けた所には早速キバナシャクナゲが咲いていた。峠に立つと、右手にヴィリューチンスキー山、その左側の谷沿いに今来た道、谷をはさんで向こうの山々、そのさらに先に限りなく山が連なっており、それが左手奥までずっと続いているのだ。とてもカメラにおさまりきれないパノラマである。山岸さんによると、景色は大雪の頂上からの眺めに似ているが、それよりだいぶスケールが大きいそうである。



この辺りはあと 1 か月もすると様々な花がみられる所だが、今はキバナシャクナゲの他には、日なたの斜面にわずかにエゾコザクラやミネズオウの花がみられたただけであった。ハンノキの低木もまだ葉が展開していない。フサスギナの胞子体（ツクシ）の肌色の茎が林立しているのが、思いがけなくて新鮮であった。

さらに数えきれないほどの「オーチェン・クルータ！」を叫んだ後、来た道を降りる。ここから道路沿いに何度か車を止めて、エゾエンゴサクを探す計画である。ちょうど春先の景色になってきたところで、山岸さんがストップをかける。先に飛び出した藤原さんが「いっぱいある！」と第一報。山岸さんは歓喜、というより安堵の表情である。

車道沿いの林を抜けると右手にダケカンバの疎林があり、その左側は広々とした草原、というより、空き地になっている。エゾエンゴサクはダケカンバの疎林から空き地にかけて、枯れた茎や葉が地面を覆っている間から、オニシモツケの太い芽生えやギョウジャニンニクなどとともに生えている。空いろの花も鮮やかに、ほぼ満開である。そしてこの景色がずっと、左や奥の林の手前まで続いている。やはりエゾエンゴサクはオニシモツケ



とセットで出てくるのだった。やがて夏にはエゾエンゴサクは跡形も無くなり、この辺はオニシモツケの高茎草本草原になるのだろう。



林の方に行ってみると、林縁にオオバナノエンレイソウがそこそこに咲き、手前に小川が流れている。小川に降りて、思いがけずシベリアイワブキを発見。もう花がついているものがある。発作的に手を出す私を制して、藤原さんが花の写真を撮り始める。何枚も近くから遠くから撮った後、「これでシベリアイワブキをすべて写真に収めた」と満足そうである。そういえば、私の写真には、使えるものが少ない。見習わなければ、と思って、真面目に写真を撮り始める。小川の岸には斜面までエゾエンゴサクが降りてきて、その下の水面ぎりぎりの所にシベリアイワブキの葉が茂り、咲きかけの蕾をつけた花茎が葉の間から数本立っている。小川の水音が心地よい。いつまでも見ていたい情景である。

山岸さんはオオバナノエンレイソウの測定に移ったようだ。春植物の専門家としては大忙しである。コドラート内の実生～成体の個体の数を数えるとのこと。オオバナノエンレイソウの実生というのは葉が一枚しかないらしい。教えてもらったのを見ると、成体の卵形の葉とは似ても似つかぬ華奢な葉で、一緒に生えているタデ科植物らしい実生やギョウジャニンニクの実生と思われるものと紛らわしい。何年もたってからやっと3葉になり、それが成長してようやく花をつける、と。そんな話を聞くと、気軽に開花個体を採集できなくなってしまう。

調査を終えると、帰途にサプライズが待っていた。車の遙か前方に、茶色のヒグマが現れたのである。小熊3頭をつれて道路を渡っていく。

「停まって！」



と、皆、カメラを出して叫ぶが、車は少しでも熊に近づこうというのだろう、停まってくれない。こちらは停まってくれないと写真が撮れない。揺れている車の中から必死でシャッターを押す。こんな条件にもかかわらず、藤原さん、山岸さんが撮った写真にはちゃんと熊が写っていた。お見事（写真は山岸さん撮影）。



実質、フィールドは最終日。アンドレイが朝 11 時に来る、というので、それまでホテル北方の湖周辺を散策。山岸さんが道端でフキタンポポをみつける。周囲のタンポポより綿毛の色が白いので気付いた、と。タンポポはまだ咲き残っているのに、フキタンポポはすべて綿毛である。そういえばロシアの教科書に「春一番に咲く植物」として載っていた気がする。カムチャツカには昔は無かったが、最近「大陸から」侵入しているらしい。

11 時からはアンドレイの車でオオバナノエンレイソウを探しに行く。市の近郊を回るがなかなか見つからない。「もっと森の方へ行こう」というと、かなり立派な道路の突き当たりの湖に連れて行ってくれる。湖岸の林の下にオオバナノエンレイソウが咲いている。山岸さんは早速調査、私は蚊と戦いながら標本の新聞紙替え、藤原さんはアンドレイにスマホで、車の写真を見せてもらっている。アンドレイの持論によると、80 年代の日本車は素晴らしい。中古でも、友人の乗っている 90 年代の日本車より頑丈だ。ちなみに最近の日本車は「だめ」なのだそうだ。

最後にもう 1 か所で調査。来るときに道路から見えて目星をつけておいた所だ。道路から降りていくと、とたんに森の中である。全体に湿地状で小川沿いに数えきれないほどのオオバナノエンレイソウが咲いている。普通よりかなり大型で丈も高い気がする。数に驚いていると、北海道にはもっと密に一面に咲く場所がある、と。ここで山岸さんと藤原さんは日暮れまで粘る。



19日はこれまでの標本の整理と搬出手続の打ち合わせで、火山研究所他をまわる。夕方、お2人を誘って、昔、私がカムチャツカに居た頃に住み着いていたアーシャお婆さんのアパートに行く。ホテルからバスで3つ目の停留所の坂を下りると、お婆さんが3階の部屋の窓から覗いていた。シャンパン、スープ、鮭ハンバーグなどをご馳走になる。懐かしい味だ。孫のキリューシャも来てくれた。去年結婚した、とのことでスマホで相手の写真を見せる。なかなかきれいな人である。料理をしたこともないのにカフェで働いているらしい。彼自身は車が大好きで、運転手をして稼いでいる。来年新婚旅行で彼女の実家に行くので、カムチャツカで買えないようなステッカーを買ってきて車に貼るんだ、と楽しみにしている。最近上司から救急車の運転手にならないか、といわれたが、試験を通ったら、お給料がかなり上がるらしい。是非がんばれ、とはっぱをかける。帰りは愛車の日産サニーでホテルまで送ってくれた。

20日。飛行機はお昼過ぎなので、午前中、最後に標本の新聞紙を替える。11時頃、アンドレイの車で火山研究所に寄り、標本をレーナに託すとそのまま空港へ。

天気は曇り空である。考えてみたら、6月というのに、一度も雨に会わなかったのは運が良かった。今回は春植物を探したおかげで、ほぼ初めて早春のカムチャツカを訪れることができた。何より、同じ興味を持つ人とフィールドを歩くのは楽しかった。アンドレイにもレーナにも、みんなに感謝である。

私の「カムチャツカ病」は、今後もずっと続くのだろう・・・。